シラーの『オルレアンの乙女』について 4.

江坂哲也

承前

同タイトル 1. (「日本福祉大学研究紀要 現代と文化」第124号, S. 1-26. 掲載)

ヴォルテールとシラーの「乙女」の意味

歴史と文学作品の関係

神の声, 第一の3種の神器

太子の仮宮殿では

同タイトル 2. (「日本福祉大学研究紀要 現代と文化」第125号, S. 1-25. 掲載)

第二, 三の神器

魔女の出現

人間モントゴメリの声と神々の声

ブルグントの翻意とフランスの統一

同タイトル 3. (日本福祉大学研究紀要 現代と文化」第135号, S. 57-87. 掲載)

和解の後に, 栄誉の授与など世俗からの誘惑

「理性」の人トルボトの死

黒騎士とは?

兜の意味と剣の喪失

乙女の咎と苦悩

同じ愛が社会の中では正反対に

前場は戦場でイギリス侵略軍指揮官ライオネルと恋に落ち, 彼を殺せず, 神の遣いになり切れなかった乙女ヨハンナの葛藤が主題であった。つまり, 神の命に背いた「罪」が前面に出ていたが, 彼女は彼との件で人間の女でしかありえなかった自分に気づき, 「神の遣い」の任を返上し, 人間宣言した。これが前場の概略であるが, その中で同時に現世での社会に対する「犯罪」の問

題が意識されていると私は触れて置いた。

この第2場ではそれが主題となる。ソレルは自分の愛するカール太子を戦場から勝者として連れ帰り、彼を国王にする戴冠式が挙行できるランスにまで導いてくれたヨハンナを見つけ、感謝の念で一杯になり、彼女に駆け寄り、抱擁する。ところが、すぐさま彼女の前に^{ひざまず}跪く。ヨハンナは驚き、彼女を起こそうとするが、

ソレル： このままにさせて！あなたの足元に跪くのは
嬉しくって仕方がないからなの — 私の沸き立つ胸の内を
神様にどうしてもお見せしたいの。私には見えないけれど、
あなたの内にいらっしやる、そのお方を賛美させてちょうだい。
あなたは私の^{きみ}君をランスに連れて来てくれました、 2620
そして今から王冠で飾って下さる天使ですわ。この目で
見みようなど、夢にも思わなかったことが実現するのですわ。

彼女はもちろんヨハンナの苦悩など知らず、この彼女が神の^{せんし}戦女としてこの勝利をもたらしてくれたと信じて、跪いたまま、戴冠式の準備とそれを見ようと駆けつける国民の、そしてお祭り騒ぎの町の様子を語り接ぎ、「こんなにも^{しあわせ}幸福一杯で、私どうしましょう」(2629)と歓喜する。ヨハンナは間もなく国王になる太子の愛する女をこのままの姿勢にしておくこともできず、立ち上がらせる。その時ソレルは彼女と目を合わせ、それを見てしまい、

でも、あなたはいつも真面目で厳しい目つきをしているのね、 2630
幸福を創ることはできても、それを共に分かち合えず、
あなたの心は冷たいままで、私たちの喜びを感じないのね。
天の栄光をあなたは見てしまって、
あなたの清い胸は、もう地上の幸福には動かされないのね。

ここで「ヨハンナは力をこめて彼女の手を握り」とト書きが始まるが、これは同じ恋の喜びを知る女としての共感を示していよう。しかしその相手となると、一方は国民皆に祝福されるフランス太子だが、自分の方はその逆であることに気付き、ヨハンナは「彼女の手をつき離す」でト書きは終わる。その彼女の冷たい反応を「天の栄光」故と勘違いして、ソレルは「あなたが女になり、そう感じられるようになれば良いのに」(2635)と言い、「武器を捨て、武装をお解きなさい。こんな鉄で覆われた胸を見たら、恋愛というものは恐れをなして、近寄って来ませんわ」(Vgl., 2640-2)と勧める。乙女ヨハンナは、そんな事をするぐらいなら、「戦い(Schlacht)でこの胸を死神にさらけ出したいわ。今は駄目よ、— 七重の鋼鉄で包んで、あなた方のお祭りから、私自身から私を守りたいわ」(2644-7)と言うが、この最後の「私自身から私を守る」とい

う言葉は、彼女の自己分裂ぶりをよく表している。そう言う彼女を結婚させれば、女に戻るのでは、とソレルは思ったのであろう、

あなたをデュノワ男爵は愛しておいでです。彼の高貴な心は
 名誉と英雄の徳にのみ開かれています。その心が
 神聖な感情に包まれ、あなたを求めて燃えているのですよ。 2650
 英雄に愛されているって、何て素敵なことでしょう、
 その彼を愛することは、もっと素敵なことなのよ。

(ヨハンナは嫌悪の色を浮かべて、顔をそむける)

あなた、彼を憎んでるの！—いいえ、あなたは彼を愛せない
 だけなのよ。あなたが彼を憎むだなんて、とんでもない。
 憎めるのは、愛しい人を私たちから奪う者だけなんですものね。 2655
 あなたには奪われる愛しい人などいないのですからね。あなたの心は
 平穩そのもの — その心が感じやすく (fühlen) なければ良いのに、

ソレルの憎悪の対象は彼女の愛しいカールを奪って行く者、すなわち戦争であり、侵略者イギリス人である。ところがヨハンナは武人でしかないデュノワ男爵とは違って「高貴な」ライオネルを一目で愛してしまい、心は彼への情愛に溢れているが、その彼はソレルだけに止まらず、フランス人皆の憎むべき敵である。その秘密を知られないように鎧で身を固め、必死に恋の喜びを隠しながら、神と祖国に対する罪人として彼女は苦悩しているのだが、それがソレルの目には「天の栄光」を見てしまったため、現世のことには感応しない心になってしまったとしか見えない。

そこまでのソレルの台詞を聞いて、ヨハンナの矛盾は頂点に達し、「私を哀れに思ってください。私の運命に涙を！」(2658)と口走るが、ソレルにはもちろんその意味が分からず、「あなたの運命に不足がある訳ないじゃないの。あなたは約束を果たし、フランスは自由になってるわ(中略)あなたに敬意を表して、一人があなたを称えれば、皆の口から次々とあなたへの称賛の声が、大河の流れのごとく発せられ、あなたはこのお祭りの女神様よ。冠を戴いた王様だって、あなたほど輝いていないわ」(2659-67)と、乙女を称えるランスの街の様子を語る。ヨハンナはフランス全体のためにこのような栄光に満ちた結果をもたらし、国民に口々に称えられているが、その彼女に較べれば、ソレルは「自分が小さなものに感じられ、赤面してしまう」(1672f.)ほどで、実は彼女にはこのお祭り騒ぎになっているもの、すなわちフランスの勝利と国王の戴冠式は二の次で、「この私の女心を一杯にしているのはお一人だけで、この気持ちで溢れ、他のことは入れないの。その彼は崇拜され、国民は彼に歓声を上げ、彼を祝福し、彼にこんなに花を撒いていますが、その彼は私の男、愛しいお方なの」(2679-84)と、自分の本心を告白する。ソレルはカール個人を愛しているのであって、太子としてフランスを統一したことも、そして間もなく

フランス国王の王冠を戴くことも単なる付属物で、彼女の愛している男が偶然そうなるだけのことで、政略結婚などは正反対である。

愛とか恋は個人としての男女を核として成立するもので、ヨハンナのそれもその点ではソレルと全く同じである。ヨハンナはライオネルの高貴な顔を見て恋に陥り、ライオネルも彼女が自分を助けてくれたことに加え、彼女の若さと美しさに心を奪われたからで、相手の国籍や身分、戦場での立場などは超越されている。ソレルがこの点で自分と同じ愛を抱いている事を知ったヨハンナは感激して、「あなたは何て幸せ (glücklich) なんでしょう。あなたを至福な (selig) お方と称えますわ」(2685) と言う。¹ ソレルの愛はカール個人に対するものから生まれていると感じたヨハンナは、彼女を「至福なお方」と呼び、その愛から生まれたこの現世的「幸せ」も享受して良く、「あなたが愛し、皆も愛しているのですわ。(中略) この帝国のお祝いはあなたの愛のお祝いなのです」(2684ff.) と、この戴冠式の祝賀雰囲気²に躊躇しているソレルを励まし、そのお祝いをそのまま受け入れるよう勧める。

それを聞いて、ヨハンナを愛とは無縁な冷たい女だと誤解していたと知り、ソレルは感激して彼女の首に抱きつき、「あなたは私を心から分かっててくれる。私あなたを誤解してたわ、あなたは愛というものを知ってるわ」(2697f.) と言う。その彼女の両腕をヨハンナは激しく振りほどき、「私のような汚らしい者に近寄って、ご自分を汚してはなりません」(2702f.) と撥ねつける。これに対して、心から理解し合えると喜んだばかりのソレルは「あなたが分からないわ」(2706f.) と驚く。これで、ソレルにとってヨハンナはますます不可解な存在となってしまった。ソレルはフランス人のカールを愛したがゆえ、民族主義の枠内でそれを実現でき、国民から祝福されるが、ヨハンナはフランスの敵であるイギリス人を愛してしまい、その枠を超えてしまったがゆえ、自らの民族の「敵」(Feindin, 2713), 「裏切り者」(Verräterin, 2713), 「罪人」^{さいにん}となり、民族主義の神の命に反したがゆえ「罪人」^{つみびと}となってしまったのである。

英雄から魔女に

第3場ではそこにヨハンナを捜していたデュノワ、デュ・シャテル、ラ・イールが登場し、戴冠式で「この聖なる旗を持って先導するように」(2716) と、太子の命を彼女に伝え、ラ・イールは持って来たその旗を渡そうとするが、(第1幕第10場で彼女がその旗に描くように頼んだマリーア像があるため)、彼女はそれを見て驚愕し、

聖母様だ！あの方が自ら、私にお見せになったあの姿のまま、 2735
ほら、こちらをご覧になってるわ、額に皺を寄せて、
怒りに燃えたお目をカッと見開いて、睨んでいらっしゃる。

(中略)

恐ろしいお方、あなたの下部^{しもべ}を罰しに来られたの。 2742

私を滅ぼして、罰して下さい。

(中略)

私はあなたとの絆 (Bund) を破り、あなたの神聖な
御名を傷つけ、汚してしまいました。 2745

ソレルも含め、その場にいた4人は皆ヨハンナのこの様子と言葉に驚き、戸惑い、不吉な前兆と見る者もいるが、とにかく戴冠式を無事に済まさなければと、デュノワはヨハンナに、

さあ旗を取れ、取るのだ。式の行列が
始まる、一刻の猶予もないぞ！ 2760

その場の全員で、抵抗する彼女に旗を押し付け、持たせ、その彼女を先頭に立たせて、退場する。

そして次の第4場はランス大聖堂前の広場となる。ここにはフランス全土からこの戴冠式を祝いに、または見物にやって来た群衆が大勢集まっている。その中にヨハンナが出奔してきたドンレミの村人、すなわち序幕に登場した人物たち、ボヘミア女からあの兜を彼女に仲介した農民ベルトラントも混じっていて、

ベルトラント： 俺たちの国で 2775
すごい事が起こってるのに、
片田舎でポケットと座ってられるかよ！
血も汗も十分流されて、ようやく
正当なおつむに王冠を載せる時がやって来たんだ。
俺たちの国王は正統で、そのお方に俺たち今から 2780
戴冠するんだから、あいつらがサン・ドニでパリの野郎に
やった式より、こっちの参加者が見劣りせんようせにゃならん。
このお祭りに顔を出さんようなのは全うな奴じゃない。
さあ、みんな一緒に叫ぼうぜ、国王万歳！

一介の農民であるベルトラントのこの台詞は、イザボがパリでイギリス王家の子供に戴冠させた式典に対抗したもので、民族意識が芽生え出した当時のフランス人民の代表的声であつたろう。第5場も同じ広場で、妹ヨハンナの姿を一目見ようとやって来た姉の一人ルイゾンは、

この目で見るとまでは、信じられないわ、
皆がオルレアンの乙女と呼んでいる、その女傑が、 2790

私たちの所からいなくなっちゃった
妹のヨハンナだなんてね。

その彼らが混じっている広場の群衆の前を戴冠式の行列は進み、教会に入って行く。シラーはこのパレードの詳細を15行にわたるト書きで指示し、台詞なしでこの第6場を終え、次の場に移っているが、その4行だけを示しておこう。「キリスト十字架像を掲げる大司教の後に、ヨハンナはあの旗を持って続く。頭を垂れ、よろよろと歩いている彼女を見て、二人の姉は驚きと喜びの体を示す。彼女の後を国王が進む」。

ト書きの「喜び」を表したのはマルゴットであろう。彼女は田舎娘であった「妹がピカピカで立派な身なりをしているのを見た」(2803f.)のだが、もう一人の姉ルイゾンは彼女の服装にではなく、頭を垂れよろよろと歩く様子に「驚き」、父ティボが見た不吉な夢を思い出し、

お父様の夢が本当になったのよ、私たち
ランスで妹の前でおじぎをするってのが、
これがお父様の見たっていう教会よ、2810
今すべてが本当になったのよ。
でもお父様は悲しい幻も見なさったわ、
ああ私、あの娘が偉くなり過ぎて、心配だわ。

第8場に父親ティボを追って、ヨハンナの婚約者ライモントが登場する。ティボは、娘が村の檜の大木に住む悪魔にそそのか唆されて村を出奔し、夢で見たことが今ランスで実現しているのを自分の目で見てしまい、このままでは娘の来世が危ないと思っている、そういう「敬虔な」キリスト教徒である。

ティボ： 見なさったろう、あの娘の足取りがふらつき、2835
顔はまっさおで、うろたえたあの様を。
あの哀れな娘は自分の調子の悪さを感じとる、
今こそ我が子を救える時だ、この瞬間を
逃してなるものか。(彼は行こうとする)

聖母が伝えた「敵を殺せ」という神の命を破って、その「敵を愛して」しまったヨハンナは、自分が掲げる旗に描かれたマリーアに叱責されながら、行列と共にその神の神殿に入って行かねばならず、そのため足取りがふらついているのだが、ティボは彼女に取り憑いている檜の大木に宿る悪魔もキリスト教会に入って行かねばならないため、それが彼女のふらつきに表れていると思っているのだろう。そして彼が何をしようとしているのかを察した許婚のライモントは、「何

をなさるつもりで」(2839) と、止めようとするが、

- ティボ： 不意を襲って、あの娘をむなしい成功に 2840
 浸っとる所から叩き出してやるのだ、力づくでも
 あいつが捨てた神様の元に連れ戻してやるのだ。
 ライモント： ああ、良く考えて！
 自分の子を破滅させるようなことはしないで！
 ティボ： あの娘の魂が助かるなら、肉は死んでもかまわん。 2845

さて、この台詞から明らかなように、父親のティボは娘の魂を古^{いにしえ}の邪教から救おうとしているが、それは父親が自分の娘を魔女裁判にかけることに他ならない。これを創作しているシラーの頭にはレッシング (G. E. Lessing 1729-81) の『エミーリア・ガロッチィ』 („Emilia Galotti“ 1771/72年初演, 1772年出版) があったであろう。そこに登場する父オドアルドと清純な娘エミーリアは真実を共有している。すなわち、アッピアーニとエミーリアは結婚式を挙げるため二人で教会に向かっていたとき盗賊に襲われ、花婿の彼は彼らに殺され、花嫁の彼女は助ける振りをした別の一団によって、公爵の離宮に連れ込まれる。それは彼女に横恋慕した公爵の情欲を満たしてやることにより、宰相としての自分の地位を保とうとするマリネリが一計を案じ、実行させたものであった。離宮でエミーリアを待っていた公爵は何かと口実を付けて彼女を解放しようとし、そこにやって来た父オドアルドは娘エミーリアと共に事の真相を見抜く。そして彼女はこのままでは公爵に純潔を凌辱され、性の泥沼に引きずり込まれ、妾にされてしまう、そういう結果だけは避けたいという思いで二人は一致する。そこで、彼女は父の短剣を借り、自分を刺そうとするが、娘の自殺を防ぐため父はそれを取り上げる。しかし、「娘を恥辱から救おうと、手近の剣を取って娘の胸に沈め、新しく命を授けた父親が昔はいましたのに」と、エミーリアにそこまで言われ、彼は彼女を刺す。エミーリアは父の腕の中に倒れかかり、「嵐がバラを散らす前に、折って頂いたのです (Eine Rose gebrochen, ehe der Sturm sie entblättert).² そのお父さまの手に接吻させ下さい」と礼を言う。丁度そこに公爵が現れ、その状況に、「むごい父親だ、何ということをも？」と驚く。父は「バラが、嵐が散らす前に折れた (Eine Rose gebrochen, ehe der Sturm sie entblättert)。— 娘や、そうではなかったよな」と言うと、娘の方は「お父さまがではありません、私が自分で、自分で」と、父をかばうが、「不正 (Unwahrheit) と共にこの世から旅立つでない。娘よ、お前ではない。お前の父が、お前の不幸せな父がだ」。それを聞き、エミーリアは「ああ、お父さま」と息絶える。

二回引用した文の「バラ」はエミーリアを、そしてそれを散らす「嵐」は公爵による凌辱を指している。しかし、二回その原文の台詞が娘と父で繰り返され、両方とも全く同じなのだが、拙訳では意味が全く逆になっていることに注意してほしい。この最初の3単語が主文を作っているが、初めの2単語の主語「一輪のバラ」(eine Rose) の次に定動詞が省略され、>gebrochen<

という過去分詞で終わっている。この過去分詞の不定詞 >brechen< は自動詞（「折れる」の意）と他動詞（「折る」）の両方に用いられるため、省略された定動詞は自動詞の過去分詞を取って現在完了を表す >hat< であるか、他動詞の過去分詞を取って状態受動を表す >ist< かである。すると前者は「折られた状態である」で、「王に凌辱される前に、（父によって）折られている」となり、他殺であるが、後者は「折った」で、「（娘が自分で）折れた」となり、自殺となる。父オドアルドは娘が父をかばって、「自らの意志であった」と言う意味を彼女の台詞に込めたと考えた。しかしキリスト教では、神の意志に反して自ら命を断つ、すなわち自殺は罪になるため天国には行けず、例えばゲーテのヴェルテルの場合、自殺のため、彼の葬列に聖職者は一人も加わらなかった。それで、父オドアルドは「娘や、自らの意志ではなかったよな」と念を押している。娘の方は、公爵らがそこに登場したため、父が娘殺しで裁かれなため、父の短剣に自ら飛び込んだのであって、これは自殺であると、父をかばっている。自殺と他殺は正反対であるが、凌辱されてしまうという真実を共有し、父と娘はお互いを思い合っている。シラーの場合はどうであろう。これまで「1」の15-6頁や「3」の14頁などで述べてきたように、父ティボと娘ヨハンナの間に真実の共有はなく、父の側からの誤解だけである。一致しているのは、レッシングの父親オドアルドとシラーの父ティボーは「娘の魂だけは救ってやろう」と言うことだけである。

さて、本来の劇の進行に戻ろう。丁度その時、ヨハンナがああ旗を持たず、飛び出して来る。偶然そこにいた人々は彼女を神の遣いで、フランスをイギリスの侵略と従属から救った者と賛美し、彼女の衣服に接吻する。彼女はその群衆に紛れこむ。ティボはそれを見て、「恐れに駆られ聖所から逃げ出して来たのだ。神の審判がああ娘に告げられたと言うことか」（2847ff.）と、娘の魂を早く救わねばという思いを強めることになる。歴史的にはオルレアン乙女は教会によって魔女裁判にかけられたが、シラーはティボに親心からそれをさせようとしている。そのヨハンナの方は人込みをかき分けながら、

あそこにはいられないわ — 聖霊が皆で私を追いたて、
 オルガンの音が、雷のように、耳に鳴り響き、2855
 ドームの天井が崩れ、私に落ちて来るんだもの。
 お空の見える広い自由な所が無性に欲しくなったの。
 ああ旗は神殿の中に置いてきたが、
 もう決して、この手があれに触れてはいけないのだけ。

彼女は、幼児イエズスを抱いたマリーアの絵が描かれた、ああ旗を捨てたのだ。人込みをかき分けているうちに、彼女は姉たちと再会し、抱き合い、黙って故郷を出たことを詫び、ルイゾンから彼女たちは父に内緒でここに来たことを知らされ、その父は突然消えたヨハンナのことを心配して、沈鬱な気分になっていたことを聞かされる。

ルイゾン： 安心しなよ！
 お父様が心配性なのは、お前も知ってるでしょう。 2890
 きっとお父様の気分は晴れ、満足されるわよ、
 私たちが帰って言うから、お前は幸せだって。
 マルゴット： お前、幸せなんでしょう。勿論そうよね、
 こんなに偉くなって、^{あが}崇められてるんだものね。
 ヨハンナ： そうよ (Ich bins),
 こうして皆にまた会えて、情愛のこもった 2895
 口ぶりの皆の声を聞けて、私あの村にいるようで、
 お父様の牧場を思い出してしまうわ。
 そこで私、羊の群れを丘の上で追い立てていた、
 そこでは私、楽園 (Paradies) にいるかのように幸せだった —
 もう私そうじゃないの、二度とそうなれないの！ 2900

前述したように父ティボはヨハンナの苦悩の原因を知らず、彼女のあの挙動を悪霊がとり憑いている故と誤解しているが、ここでも姉のマルゴットの言う「幸せ」(glücklich)とヨハンナの「そう (bins の es)」は異なっている。姉の方はドンレミ村から姿を消した過去の妹がこのように出世しているという現在を指して、そう言っているが、現在の自分から逃れたい彼女はそれ以前の懐かしい村からやって来た姉たちに再会できてであり、彼女の「幸せ」は過去の事なのである。神の命に反した今の彼女はあの「楽園」のような幸せにもう戻れないことを嘆き、ルイゾンの胸に顔を埋める。そこに姉たちの結婚相手とあの農夫のベルトラントが現れ、彼らに囲まれているうちに、彼女はこれまでの事が夢であったかのように感じ、

あの魔法の木の下で私、眠り込んでしまい、 2908
 いま目覚めて、私の周りに皆がいるのよね？
 (中略)
 私、ドンレミを出たことなんて全然なかったのよ。
 そうはっきり言って、私の心を喜ばせて。
 ルイゾン： 私たちランスにいるのよ。お前がした事は
 単なる夢ではないのよ、お前は皆すべて本当に
 やり遂げたのよ。— しっかりして、自分の身を見て、 2920
 お前の金びかの鎧を触ってごらん。
 ベルトラント： わしの手からあんたが受け取った兜がこれだ。

最後のベルトラントの台詞が示すように、シラーはあの効力を失ってしまった兜をヨハンナに

まだ持たせているが、これについては留意するだけに止めておこう。さて、姉たちからランスにいるという現実を悟らされた彼女はそこから逃れようと、身につけている「忌わしい飾りものを捨て」(2933)、これまでの虚栄の償いをするため、父のいるかつての「楽園」に帰りたいと言う。彼女はこの時点ではまだかつての牧歌的なドンレミ村での生活に戻るとい希望を持つことができたのだろう。

その時トランペットが鳴り響き、第10場となり、戴冠を終えた国王、ソレル、大司教らが登場する。ヨハンナはランス奪回の戦場で敵将ライオネルに止めを刺せなかったという瑕疵があるにしても、この式典終了により彼女は聖母マリアの「太子に戴冠せよ」という命を成就したことになろう。戴冠された国王を見て群衆も「国王万歳、カール7世」(2939)と、繰り返し歓呼する。シラーは台詞の前でこれまで太子を「カール」としていたが、戴冠式後のこの場からは「国王」と変えている。

国王： 我が善良なる国民（Volk）よ、汝らが愛に感謝するぞ。 2940

この王冠は、我らがために神がこの頭に置き賜いしが、
剣によって勝ち取り、獲得されたものでもあり、
フランス人の尊い血が塗り込められてもいるが、
今やオリーブの枝でこれを平和的に若返らせるぞ。

我らが為に剣を振ってくれた者ら皆には感謝（gedankt）を、 2945

我らに対抗した者ら皆には容赦（verziehn）をするぞ。
それは、神が我らに恩寵（Gnade）を示して下されたからで、
我らが国王の第一の言葉は、— 恩寵とするぞ。

「恩寵」と訳した原語 >Gnade< は「神や上に立つ偉大な者から下の低き者に良き行為（Wohltaten）という形で示される厚情（Wohllwollen）で、しかもそれを受ける側はそのような行為に全く相応しくない場合もしばしばある」³ と言うものである。カール太子は神の怒りに触れ見放されたと思い、⁴ 敵前逃亡しようとしていたが、神はその彼にヨハンナを遣わし、イギリス軍を打ち破り、ブルグントとの和解を実現させ、侵略軍からランスを奪回させて下さり、こうして戴冠式を終えることができたと思っている。それが「神の恩寵」という言葉で表されている。その神に倣って、彼は「上に立つ偉大な」国王として、この最終引用詩行の「我らが」という言葉が示すように、「国民の」国王として国民に「恩寵」を約束している。そしてこのような啓蒙主義的国王としての彼の「良き行為」とは、「平和的若返り」という新国家の建設、「感謝」という恩賞、そしてブルグント勢に対する「容赦」である。これらの抽象的な「恩寵」を具体化することはシラーにとってこの劇の範囲外であるとしても、このプロローグでヨハンナが村人ベルトラントらを前に振るった宗教的・政治的熱弁、すなわち外国のではない私たちの王様には「力と慈悲（Warmherzlichkeit）」(357)があり、私たちと「父と子の関係になれる」(365)と

いう内容⁵と相通ずるものであろう。

さて、この国王戴冠の宣誓とも言える言葉に群衆は「カール慈悲王 (der Gütige) 万歳」と叫び、国王はヨハンナに向かって、

これは神に遣わされた^{もの}女だ、お前たちに
 生え抜きの国王を与えてくれたのだ、2955
 他国の暴政というくびきを打ち破ってだぞ！
 彼女の名はこの国の守り人
 聖ドニと同じものとし、
 彼女の榮譽を称え、祭壇を高くそびえ建てさせようぞ！

これに呼応して群衆は「乙女万歳、救い主万歳」(2960)と叫び、トランペットが鳴り響く。国王はヨハンナに向きなおし、「お前も我らと同じく、人間によって作 (zeugen) られているのなら、どんな幸福 (Glück) がお前を喜ばせるのか言ってくれ」(2961f.)と問う。彼女の幸福はあの敵将ライオネルとの恋愛を実現することであるが、それは聖母マリアの命に反したことであり、もちろんフランス人の中ではおくびにも出せない。すると、この乙女の心中など露知らずの国王は、さらに言葉を継ぎ、

だがしかし、お前の生国があちらの上にあるのなら、
 お前は天上の性質を持つ光 (Strahlen) を
 乙女の体に包んでいるのなら、2965
 我らが5官の枷 (Band) を取り去り、
 天がお前をご覧になるままの、光に包まれた
 お前の姿を見せてくれ、さすれば我らは地に跪き、
 お前を崇め^{あが}称^{たた}えようぞ。

「5官の枷を取り去れ」と言うことは、「1」で先述したヴォルテールのジャン・ダルクの処女検査⁶に等しく、光を外に出さないようにしている「衣服を脱げ」ということまでではないにしても、この国王の要求は天使検査とも言えようし、間もなく始まる魔女裁判と比べて天使裁判とも言えよう。さて、この国王の言葉で、舞台の上ではお付きの者も群衆も固唾をのんで、乙女の体から眩しい光が放たれる瞬間を期待して、ヨハンナに視線を向けていると、そこに群衆をかき分け、ようやく娘の所に到達したティボが登場する。その彼を見いだして、ヨハンナは「あっ、お父さんだ」(2969)と驚く。「父親だ」とよ」(2970)とささやく周りからの声を聞きながら、ティボは自分の娘に向かって、

わしがこいつの父で、この不幸な娘を作って (gezeugt) 2970
悲嘆にくれておる親でござえます。己が娘を
告訴せよと言う、神の裁きに追い立てられましたな。

ブルグントは何事かと驚き、デュ・シャテルは恐ろしい事の始まりを予感する。そして、ティボは国王に向き直って、こう続ける。

あんたさんは神の力で救われたと思っとるんですか。
王さんは騙され、フランス人は目くらましにおうてますぜ。 2975
あんたさんは悪魔の術に助けられたのですぜ。

皆びっくりして後ずさり、デュノワは「この人は狂っているのでは」(2977)と漏らすと、これを聞き咎めて、

ティボ： わしはまとも、狂ってるのはお前さんで、
ここに居る人たち、そしてこの賢い大司教さんまで、
皆さんは天上の主が下賤の少女を通して
お告げをされたと信じていらっしゃるんですからな。 2980
あいつは平然とまやかしの奇術で民と王も騙して
めえりましたが、父親に面と向かっても
やり通せるかどうか、見せてもらいましょう。
三位一体 (Dreieinen) のお方の名にかけて、わしに答えてみる、
お前は聖者や清き者たち (Reinen) の類いか。 2985

シラーは歴史上の魔女裁判をこの場で展開しようとしていると先述したが、先ほどの国王の「天使の姿を見せてくれ」という希望からそれは始まっていると言えよう。それを人間の不遜な好奇心から出た「天使裁判」とすれば、と先述したが、これは娘の魂だけは救ってやりたいと言う親心から出た「魔女裁判」と言えよう。どちらの裁判も人間ヨハンナにとって当惑以外の何ものでもないだろう。彼女は神の遣いと信じて殺人剣を振るって来たが、ライオネルとの遭遇を通して、第4幕第1場で同情や情愛に溢れ、感じやすく繊細な乙女として創造された自分には人を殺すことなどできないから、何の躊躇もなくできる天上の「清い者たち」(die Reinen, 2602)、すなわち聖霊たちにそれを命じてくださいと、その任を辞退していたのだ。⁷そしてこの場で実の父に、その類であると言えるかと詰問されているのだが、神の命を破ってしまったので、もはや「清い女」(die Reine) でなくなった人間ヨハンナは沈黙したままである。父ティボは先述したように片田舎の自称敬虔なクリスチャンである。そういう一神教徒の父に対して娘のヨハンナ

は多神教で、樞の大木の霊も聖母マリーア、そして自分の前にその彼女を遣わした神、ジブシーの女がベルトラムに押し付けた兜も含めて、それらすべてに神意を感じ、複数形で「神々」(Götter)と呼んでいるのである。彼女の世界観は素朴な汎神論であり、その神々は当時のドイツ・ロマン主義に大きな影響を与えたシェリング (F. W. J. Schelling 1775-1854) の自然も精神と同一の原理で把握しようとする同一哲学をも連想させないだろうか。

舞台では彼女を神の遣いではないかと思っている国王を始め、それを信じているソレルたち、そして光放つ彼女の天使の姿を期待してここに集まっているフランスの国民たちの前で、この父親の告発に彼女はどうか対処すべきなのだろうか。シラーはト書きで、彼女を沈黙させ、「微動だにせず立」たせている。

その彼女の心中が分からないソレルは父親の詰問に対する彼女の様子を見て、「まあ、口が利けない (verstummt) のだわ」(2986) と驚く。この「口がきけない」という動詞 >verstummen< は「何か大きな力 (Gewalt) により衝撃を与えられるとか、圧倒されて、または驚き、仰天、恥入って話すのをやめる」⁸ と言う意味である。ソレルはその「大きな力」を明示していないが、実の父親にこのようなとんでもない濡れ衣を着せられていること解しているであろう。ところがティボはその大きな力を彼が先ほど言った父 (神) と子 (イエズス・キリスト) と聖霊の「三位一体のお方」と解し、「この恐ろしい名前の前ではそうなりますがな、地獄の底でさえ恐れられる名前ですからな」(2986ff.) と、娘への疑惑をますます深め、こう続ける。

— こいつが聖女で、

神の遣いですって！— 呪われた場所で 2990
 でっち上げられたお話ですぞ、魔法の木の下で
 昔から悪霊たちが儀式をやっとる — そんな場所でこの娘は
 人間の敵に自分の不死なものを、魂を売ったのですぞ、
 はかないこの世の栄誉で己が褒め称えられるようにな。
 こいつの袖をまくらせて、この印をご覧なさい、 2995
 地獄の者がこいつに付けて行った目印ですぞ。

この印は第3幕第9場の戦場で黒騎士が「ランスで太子に戴冠せよ」という命を受けたヨハンナに「そこに行くな」と警告し、自分を神の遣いだと信じている彼女に「お前は人間でしかない」と教えるために手で触れた時のものである。それをティボはヨハンナが村を出奔する前に樞の木の下で悪霊と契約し、その印として付けられたものであると思ひ込み、娘の魂だけは救ってやらねばと、「魔女裁判」の告訴人として父親の愛を示そうとしている。このような父親に対する評価は分裂し、ブルグントは彼女の腕に付けられた印を見て、「ぞっとする！— 自分の娘を告訴するのだから、この父親を信じざるをえまい」(2997f.) と言ひ、彼女を妻にと望んでいるデュノワは「我が娘の内にある己自身を貶めるような狂人の言うことなど信じられるか」(2999f.) と

反対する。ソレルは彼女に「黙っている (Schweigen) 場合ではありません、とんでもないことになりますよ。(中略) 一言だけ、(中略) 私は無実だとはっきり言ってちょうだい、それで私たちは信じるから」(3001ff.) と催促するが、彼女は依然として微動だにしない。ソレルはそれに驚いて彼女から離れる。このソレルの台詞にある「黙っている」の原語は「賢さ、慎み深さ、服従などからそうする」⁹ という意味で、彼女はヨハンナの沈黙の原因をこんな無茶で馬鹿らしい告発には取り合わないという「賢さ」に、または父を敬っての「服従心」に求めているようであるが、それでは「とんでもない」(unglücklichelig) こと、すなわち魔女にされ、火刑に処されてしまうかも知れないと危惧している。その忠告にもかかわらず、彼女は黙っているの、ソレルももしやと思い、彼女から離れたのだろう。次に彼女との結婚を望んでいるラ・イールは「びっくり仰天して、口を閉ざしているだけだ」(3078f.) と彼女をかばい、無実だと反撃するよう励ますが、彼女は相変わらず不動のまま、彼も後ずさる。すると恋敵のデュノワが進み出て、びくつき震えている民衆や貴族たちに向かって、「彼女は無実だ — 俺が保証してやる」(3017) と彼女をかばい、それに異を唱える奴には騎士道に則り決闘を申し込むぞと、手袋を投げる。¹⁰

ラ・イールもデュノワも彼女が腕を負傷したのはドンレミ村出奔以前ではなく、ランスを取り戻す戦いの中でのことと知っている。¹¹ それは彼らが求婚する乙女を弁護できる絶好の証言となるはずであろうに、二人はそれを忘れてしまったのだろうか。否、シラーによって彼らは忘れさせられている、そう言えるのではないだろうか。その理由の一つは悲劇の筋の統一的展開のため、ここで娘のヨハンナが無罪になり、父親が早とちりで恥をかいてはドタバタ喜劇になってしまうからであるが、次の二つ目の理由が最も重要なものと言えよう。それは魔女裁判そのものへの批判である。登場人物たちは彼女の父親が訴えているのだから、ひょっとしたらそうかも知れないと思い、そして腕の傷跡を悪魔との契約の印だと見せつけられると、舞台上の人々の彼女への信頼は動揺してしまうが、その下で見ている観客はすべてを知っているの、この魔女裁判というものがいかに不当で馬鹿げたものであるかを知るだろう。ヴォルテールが卑猥な要素を混入し、「魔女」か「聖女」という問題を「性女」か「清女」にすり替えてパロディ化し、火刑に処した歴史上のあの裁判を批判したのに対して、シラーはこの裁判に観客という傍聴人を入れる事によって、この裁判への批判を強化していると言えまいか。観客はヨハンナの神とフランス社会に対して犯した二つの罪とそこから生じる彼女の苦悩を知っているにしても、「私は悪魔と契約したことはありません」という一言をじりじりしながら期待しているだろう。シラーは劇場全体のその空気を驚愕に変え、筋を大きく展開させるために、そこに突然激しい雷鳴を起こしている。皆驚いて立ちすくむが、彼女の父はこの雷に乗じて、ヨハンナに面と向かって、

ティボ： あちらで轟き鳴っている神にかけて答えてみろ。 3021

言ってみろ、「私は潔白だ」と、「心に悪魔を宿している
なんて嘘です」と。それで、わしを嘘つき呼ばわりにしてみろ。

こうして自然現象の雷は娘の魂を救おうと必死なティボにより神にされてしまった訳であるが、ベンジャミン・フランクリン (Benjamin Franklin 1706-90) が避雷針を考案したのは1749年で、この作品成立の50年ほど前であった。するとシラーは雷を自然の電気現象と承知の上で、この劇の舞台となっている15世紀の人々の自然および雷観をこのように描いていることになる。すなわち神の声とか、何かとんでもない事態の前兆としてである。

さて、舞台では「さらに激しい落雷となり、民衆は四方八方に逃げ去る」(3023 詩行後のト書き)。父ティボは娘の魂を救おうとの親心から、あの「わしを嘘つき呼ばわりしてろ」(3023) と言う台詞を最後に劇中から消えている。きっとト書きにあった民衆の中に混じって退場したのだろうが、もちろん娘の魂を救えなかった哀れな父親として肩を落としながらである。「3」でトルボトの劇からの退場で書いたように、¹²ティボもシラーによって独立した個人として劇中に投入され、片田舎の自称敬虔なキリスト教という独特な思想と「心配性」(2890) という性格で、独り相撲を取っているように行動させられ、退場させられている。

民衆が去った舞台に残ったのは主要な登場人物たちで、ブルグントは「神よ、我らを守りたまえ。何と恐ろしい予兆だ」と叫び、デュ・シャテルは側近として、国王にそこから避難するよう声をかける。大司教はヨハンナに向かって、

神の御名においてお前に訊ねるぞ。お前の
3026
沈黙は潔白の気持ちゆえか、罪ゆえか。
この雷がお前をかばって声を挙げているのなら、
この十字架に触れて、合図してくれ。

ティボも大司教も雷鳴を神の声と思っているが、どちらもその声が理解できず、ただ前者は娘の有罪を信じて、大司教は乙女の潔白を望みながらである。大司教の促しにもかかわらず、彼女は依然として沈黙と不動のままである。落雷はさらに続き、皆はヨハンナを残して退場し、デュノワだけが残り、

お前はわしの妻だ — わしはお前という女を
3030
最初に会った時から信じて来たし、今でもそうだ。
このあらゆる印より、あの上でしゃべっている
雷よりも、お前の方をずっと信じている。
お前は気高い怒りから黙っているのだ、
聖なる潔白 (Unschuld) に包まれているので、こんな下劣な
3035
疑惑に反駁する気にもなれんのだ。
— そんなもの気にするな、だが俺にお前を任せてくれ、
俺はお前の潔白を疑いなどしなかったからな。

何も言わずに、お前はわしの腕を、そしてわしはお前の
良きものを安心して、頼りにして良いという形かたと印として、 3040
お前の手をわしに差し出してくれ。¹³

これはヨハンナの潔白に絶対的な信頼を寄せているデュノワの求婚の言葉で、そう言って彼は手を差し出したのである。ところで、3035, 8詩行の「潔白」の原語は >Unschuld< で、「純潔、処女性」という意味もある。これが「お前の良きもの」(deiner guten Sache, 原文では3041詩行)と関連していると思われる。すなわちデュノワは皆が何と思おうと、雷として現れた神がいくら吠えようと、ヨハンナは魔女ではなく聖女であること、そして彼女が「1」で述べたヴォルテール流に言えば「性女」ではなく「清女」であることを信頼しているから、この求婚を受け入れる印として「手を差し出してくれ」という意味であろう。そして彼女がそういう乙女ならば、自分の「腕」(Arm, 武力)で守って見せるから、「安心して頼りにしてくれ」と手を差し出す。彼女はそっぽを向き、それに応えない。彼女には意中の男性が他にいるということもあろうが、神の遣いとしての「清い女」(Reine)から人間になり、「愛」(Liebe)が問題である彼女にとって、「聖女の潔白」・「純潔」とか中世騎士道の「腕力」などと求婚されても、それでは次元が余りにも違い過ぎるのであろう。それどころか現在の彼女にとって重要なのは神に選ばれた戦士としてではなく、フランスに肩入れする民族主義的の神にも承認されるようなライオネルとの人間としての愛であり、ソレルの愛のようにフランス社会の中でも祝福されるべき愛であって、デュノワのような神や社会と断絶した、またはそれと対立するものであってはならないのだろう。しかし、そんなものが果たして実現できるのだろうか。

舞台上デュノワはヨハンナの拒絶に遭い、驚き、立ち尽くす。そこに国王の友であり側近であるドゥ・シャテルが戻って来て、彼女に「ダルクのヨハンナ、国王はそなたが侮辱を受けず、町から去ることを許される。門はそなたのために開けてある。無礼を働く者もない。国王がそなたの無事を保障されているのだ」(3042ff.)と追放を告げ、デュノワには「ここにこれ以上お止まりになれば、貴殿の名誉に係りますぞ」(3046)と警告し、戴冠式が「とんだ結末」(3047)で終わったことに嘆息し、退場する。デュノワは彼女に未練ありげな素振りを見せながらも、彼の後に続く。舞台にはヨハンナ一人が残され、しばらくすると、許婚のライムントが登場し、この時を逃さず、町を出ようと、彼女の手を取り、連れ出す。そして、第4幕が下りる。

この幕はフランスの統一と国王の戴冠という華やかな楽曲に包まれた民族的祝祭で始まったのに、その最大の功労者と英雄である乙女ヨハンナが、聖ドニと同じくまつ祀ろうという国王の宣言から「天使裁判」が始まり、娘の魂だけは救おうとする父ティボの出現により「魔女裁判」に急転し、彼女は国王の温情により歴史上の火刑を免れはしたものの魔女にされ、追放されてしまった。ドゥ・シャテルが嘆息したように、まさに「とんだ結末」である。

シラーの時代状況とその問題

雷は既に第3幕第9場、すなわち黒騎士との場に出てきた。そこではヨハンナが黒騎士に打ち掛かっても全く相手にならず、彼にちょっと触れられただけで彼女は動けなくなり、彼は「死すべき定めにある奴を相手に、殺しておれ」(2445)と言い残して、地中に消えて行った。その時稲妻が走り、雷鳴が轟いていた。¹⁴ その場では「死すべき定めにある」人間ヨハンナとそういう定めのない霊である黒騎士という「部類」の違いが問題とされていた。先ほどの第4幕第11場の雷もシラーは自然の電気現象としてではなく、人間とは違う「部類」の現れとして描いている。それが樫の大木の霊か、または神なのか、それについてはここでは立ち入らない事として、黒騎士の規定した「死すべき定めにある」人間、そして乙女ヨハンナの言う「神様に感じやすく (führend) 創って頂いた心」(2596f.) を持つ人間という「部類」が、シラーの時代ではどのように考えられていたか見てみたい。それがこの作品をより深く理解するのに必要なことと思われるからである。

レッシングは「再々抗弁」 („Eine Duplik“ 1778年) でこう書いている。「神が右手の内に全真理を、そして左手の内に真理への比類のない絶えざる活発な意欲 (Trieb) を持ち、— 後者には絶えず間違いを犯し (sich irren) 続けるということが含まれているのだが —、「どちらか選べ」と、私に言われるならば、私は恐る恐る彼の左手に跪き、こう言うだろう、「父よ、与えたまえ。純粋な (reine) 真理 (Wahrheit) はただあなただけのものですから」。¹⁵ 「純粋な」という原語は >reine< で、父ティボとヨハンナの台詞にあった「清きもの」(Reine) と同じで、そういう「真理」は神や天使に属し、「間違いを犯す」人間という部類のものではないと言うことである。ゲーテはこのレッシングの内容を『ファウスト』で神の言葉として、「人間は、努力する限り、過ちを犯すものだ」(Es irrt der Mensch, solang' er strebt. 317 詩行)¹⁶ と簡潔に表現している。「過ちを犯す」部類である人間が「比類のない絶えざる活発な意欲」で「真理」を追求する、これが人間として生きると言うことである。黒騎士との戦いの場では「死すべき定めにある」部類に属す人間が問題になっていたが、ライオネルとの遭遇により、神の遣いとして「清い」乙女ヨハンナは聖母マリアの命に反するという罪を犯し、その「清きもの」の任を辞した。その彼女は今後「感じやすい」部類である人間として「過ち」を犯しながらも「真理」を追求しなければならないと言うことになる。

「2」で述べたように、フランスの人間機械論では自由や道徳性という人間の主体的なものが危機に瀕するとシラーは見なし、外界と頭脳の間にある「魂」(Seele) をその主導権争いの場と考えた。¹⁷ この「魂」はエーバーハルトの類語辞典では、「考える、研究する、熟考する精神 (Geist)」と較べて、あらゆる生き物の「感じる (empfinden)、そして動かす (bewegen) 力であり、狭い意味では感情 (Empfinden)、欲望 (Begehren) の中枢」¹⁸ と説明されている。ヨハンナがライオネルの高貴な顔を見て「感じた」(fühlen) のは^{まき} 将にこの「魂」においてであり、

その後の苦悩もここにおいてであった。シラーは処女作『群盗』(„Die Räuber“, 1781年出版)の差し替えられた序文で、この「魂」について、「このドラマ的手法の大きな特権が魂が最も密かな働きをしている現場を捉えること」¹⁹としている。『オルレアン乙女』の登場人物たちも15世紀の百年戦争という外界からの刺激を感覚器官で受け、「魂」の中で各人それぞれの感情を抱き、思想・信条そして性格に従って主体的に行動している。まさにそこに各人の自由があり、それぞれの行為を決している倫理性がそこで豊かに発揮されると言えよう。

カント (Immanuel Kant 1724-1804) は『実践理性批判』(„Critik der practischen Vernunft“, 1788)で純粹実践理性の根本法則を、「汝の意志 (Wille) の格率 (Maxime) がいつも同時に普遍的な立法 (allgemeine Gesetzgebung) の原理と見なされるように行為せよ (Handle)」と書いている。「格率」という訳語は哲学の専門用語で、一般にはなじみの薄い語である。これはクレーナー (Kröner) の哲学辞典によれば、ラテン語 <propositio maxima> (ドイツ語で >höchster Grundsatz<, 「最高原則」の意) に由来する語で、「普遍的な生活規範, 意志 (Wollen) の主体的原則」と説明されている。²⁰ エーバーハルトの類語辞典では、クレーナーにあったラテン語のドイツ語訳 >Grundsatz< (原則) との違いを明示して、これは「行為 (Handlungen), 実践 (Praxis) の基礎となる原則だけであり、例えばユークリッド幾何学などの科学的な原則は含まない」とある。²¹ 「原則」は科学的なものも含むが、「格率」は個人の意志による行為「原則」ということである。カントのあの言葉を砕いて言えば、「普遍的な」のドイツ語 >allgemein< は >all< (すべてに) >gemein< (共通な) と言うことであるから、「君が何かしようとする時は常にその原則が同時に、皆がそうしようとする立法の原理と合致するように行為せよ」とでもなる。そしてこの自主的に自らに課する命令は「～ならば、～する」という仮定条件を設ける「仮言的な」(hypothetisch) なものではなく、「必ず～せよ」と無条件で断定的な、(哲学用語では「定言的な」(kategorisch), ものである。これは、例えば「人を助けると、天国に行けるから、何かお返しを貰えるから、または気分が良くなるから、助ける」という条件付きのものではなく、「善であるがゆえ、善をなせ」という定言的な命令である。カントのこの言葉は「魂」の中で「自律」的に自らの「意志の格率」を立てるのであり、自ら「普遍的な立法の原理」と見なされるよう行動するのであって、他から強制される「他律」ではない。それ故この道徳律はシラーの重視した道徳と自由を保障していると言えよう。ちなみに、この「格率」が自由であるのに対して、ヨハンナが受けた神の「命令」(Gebot) は「他律」で、彼女に自由はない。そして神の命令は個人である彼女に対して、そして「イギリス人は皆殺しにしろ」と言う内実に対して無制限の拘束力を持っている。さらにこの「命令」は個々の人と事に対するものであるが、全体に対して普遍的な拘束力を持つのは「法」(Gesetz) で、ヨハンナが敵のライオネルを殺さず逃した事は「戦争」(Krieg) 中の兵全体に課された「法律」(Gesetz) である「軍律」(Kriegsgesetz) を破ってしまった事になろう。カントの道徳に関してもう一つ重要なことは、お互いの人格をお互いに「目的」として尊重し合わなければならない、決して相手を「手段」と見なしてはならないという事である。これがこの劇の最後で重要な意味を持ってくる。

シラーは『優美と品位』(„Anmut und Würde“ 1793年出版)でこう書いている。「生物としては知られているものの中で人間だけが、人格(Person)として、単なる自然的な存在にとっては断つことができない自然的必然性の連環に自らの意志(Wille)で干渉し、自らの内に全く新鮮な一連の現象を創り出す特権を持っている。人間がそのように作用する(wirken)活動(Akt)は特に行為(Handlung)と言い、そのような行為に源を発する遂行(Verrichtung)という活動はもっぱらその行跡ぎょうせき(Taten)と言い、人間は自分が人格であることをその行跡によってのみ示すことができる」。²²

ここで問題とされているのは「行為」と「行跡」の違いである。そしてこの「行為」は動詞>handeln<の名詞形>Handlung<で、カントの定言的命令にあった「～行為せよ」の>Handle<も同じ動詞の二人称単数>du<に対する命令形で、両者は品詞と形態が異なっているだけで同じものである。この>Handlung<は他の生物が自然の必然性に従うだけであるのに対して、人間はその必然性の連環に自らの意志で立ち向かい、それを切断し、全く新しい現象の連環を創る自主的「行為」である。これはもちろん、あの「魂」の中で行われるもので、ここに自由と倫理性がある。このシラーの文中で見れば「行為」の定義が明示されているから疑問の余地はないが、果たして>Handlung<をそう訳しただけで正しく意味が伝わるだろうかと思ひ、小学館の『国語大辞典』で調べて見ると、「①ある意志をもってする個人的なおこない。所為。不正行為。②哲学では自由意志による行動。責任を帰せられる行動。心理学では、環境からの刺激に反応する有機体の行動。③刑法上では、人間の自発的な意志のあらわれとしての身体の動作、または動作をしない状態。民法上では、法律行為」と説明されている。シラーはもちろん②の哲学的な意味で使っているが、それと区別した他生物の自然的必然性の連環に従うしかない行動にも日本語では心理学で使われ、③では刑法の法律などが扱う拙訳語の「行跡」の意味までもこの一つの訳語が含んでいる。これには驚かされた。私の「行跡」という訳語は日本語として相応しいかどうか分からないが、シラーのこの文意を理解するために、もう少しここでドイツ語が持っているそれぞれの定義の相違を明らかにする必要があるようだ。

そのため主にエーバーハルトの『類語辞典』を利用し、その重要な語の意味を先ず調べてみたい。「人格」(Person)はラテン語>persona<(「仮面」の意)からの外来語で、仮面を付けて演じる役、登場人物を意味し、そこから「自覚した自我の保持者として特殊な個性を持っている個人としての人間」²³という意味である。そういう「人格」としての人間の「行為」(Handlung)は魂の中で理性的な意志によって規定される力の表出で、それ故その「行為」には責任が伴うが、子供はまだ理性的な意志が未熟で、「行為」する能力がないためその責任を問えない。このため少年に対して特別な配慮として少年法が設けられると言えよう。この「行為」の中で先行する意思決定を問わず、現実化されたことのみ注視する場合、>handeln<ではなく「～する、行う」(tun, この動詞の名詞が Tat)という語を用いる。どんな「行跡」(Tat)も魂の中にそうさせる契機があるのだから「行為」であるが、しかしどんな「行跡」も「行為」であるとは限らない。なぜなら中止も一つの「行為」であり得るからである。魂の中で考え、中止することは確

かに「行為」であるが、それを外に行動として外化しなければ、その「跡」としては何も残らない。さらに「軽率な」とか、「不注意な」「行為」とは言うが、「軽率な」とか「不注意な」「行跡」とは言わないのは「軽率」とか「慎重」、「不注意」とか「注意」は魂の中の「行為」で、これは感覚に作用する外的な結果を生じ得ないからである。それゆえ哲学者はどんな「行為」が自由であるか（例えば、「格率」が褒められるから老人に席を譲るという仮言命令と、何も考えず、それが善であるが故、席を譲る定言命令とで、どちらが自由であると言えるか）を探求し、裁判官は魂の中をそもそも裁けないから、「行跡」の状況を調査し、法律を「行跡」に適用する。

何かを「遂行」(Verrichtung) すると言うことは、義務 (Pflicht) とその要件 (Sache) の性質から必要とされる順序だった仕方、ある事柄を終結させることである。²⁴ 例えばヨハンナは太子に戴冠させよと言う神の命を受け、その義務を負い、それを順序だった仕方ですたため、まずオルレアンを解放し、野営している敵陣に奇襲をかけ、同盟している敵に不和の種を蒔き、次にブルグントを太子と和解させ、ランスを奪い返し、最後にその大聖堂で戴冠式を挙行できるようにと任務を「遂行」した。それ故この「遂行」には「魂」の内は全く関係していないのであって、ある仕事を適切に順序立てて達成すると言うことである。「行動」(Akt) はラテン語 <actus> に由来する語で、ドゥーデンの『外来語辞典』では >Vorgang< (出来事, 成り行き), >Vollzug< (実行, 遂行), >Handlung< (行為) とされている。シラーは「行為」という「行動」と「行跡」という「行動」とは違うと書いているのだから、この辞典のように >Akt< を >Handlung< と言い換えても同語反復となってしまうが、シラーはこの「行動」(Akt) という語で、それらの名詞の動詞 >vorgehen< (起こる, 行われる), >vollziehen< (執行・挙行する), >handeln< がそれぞれ「生起したり, 行われること」を表していると言えよう。シラーは死去しているが、ゲーテはまだ生存中の1828年に出版された『外来語辞典』では >Feierlichkeit< (厳粛な行動), >Amtsverrichtung< (職務の遂行), >Bühnenaufzug< (劇の幕) などと説明されている。²⁵ 特別な効果を出すため外国語を使う傾向があるが、一つのまとまった行^{おこな}いや部分を示すためこのラテン語を使用するようになったのだろう。このラテン語で、戴冠式の挙行は「厳粛な行動」、来賓ブルグントをもてなすのは宮廷人の「職務の遂行」、劇で登場人物が一つのまとまった事件を演じると「幕」になるという訳だろう。それ故シラーによれば、ライオネルとの闘いで、彼を見て愛してしまい（これは「魂」の内でのこと）、止めを刺せなかったというヨハンナの「行為」(Handlung) という「行動」(Akt) と、乙女がイギリス軍を打ち破り、フランスを統一し、ランスでの戴冠式の先導した「行跡」(Tat) という「行動」(Akt) は違い、父ティボが娘のその「行跡」を悪魔との契約によるものと告訴した魔女裁判は、「魂」の中でのことを裁くから間違っていると言うことになる。人間という部類にはそうする能力がないのである。

私のそれぞれの訳語が日本語として相応しいかどうか不安であるが、私は「行為」という言葉を「魂」の中（日本語では普通「心の内」と言うだろうが）でのものも含み、外から感知できる力の行使をすることとして使ってきた。そして「行跡」という言葉には「人が行ってきた事柄」

(『日本語大辞典』小学館) という意味であるが、それには、心で思い考えたことから物理的力の外化という知覚できる行動が生じるのだが、心中のことは分からないから問題とせず、目に見える外化されたものだけを扱うという意味で、それを「跡」という語で強調している。「行動」は前述したように私は、「行為」と「行跡」二つの「動き」として使用して来た。ここでも外国語を日本語に移すことの難しさをつくづく知らされた。

ゲーテは『ファウスト』で主人公に書斎で聖書のドイツ語訳を始めさせている。「光あれ」で始まる神の創世を「はじめに言葉ありき」ではなく、„Im Anfang war die Tat!“²⁶ にしようと決断させている。大山氏はそのドイツ文を「はじめに行いありき」²⁷ と訳されている。「行い」と訳されている原語は >Tat< で、拙訳語の「行跡」である。これまで述べたように、このドイツ語に対応する良い日本語がないから、ここで「行跡」と訳しても読者に正しく伝わるかどうか問題で、自然な日本語としては「行い」の方が良いだろう。但し、その意味は「おこなうこと、行動、ふるまい、道徳的な見地から見た人の行状、身持ち、仏道修業、勤行、神事をつとめること」²⁸ などという辞書の意味では、到底その原語の意味に到達するのは難しいだろう。ファウストはその前に地霊から、お前は人間という「部類」でしかないと自己認識させられている。²⁹ それゆえ彼は天地創造を「行為」(handeln) した神の真意(前述したレッシングの「純粋な真理」に該当しよう)を直接知ることなどできない事を承知している。すると、その真意から外化された「行跡」、すなわち神が創った天地というこの現世界の探求から始め、人間としてグレートヒェン悲劇などの過ちを犯しながらも飽くなき努力を続け、それを統べている本質である神意に人間的に近づこうということ、これがこの場でのファウストの真意であろう。そして、シラーの人間宣言したヨハンナにとっても感じやすい「部類」として百年戦争の中でどう「行為」し、犯したあの二つの罪をどう克服するのが問題となるう。

ところで、シラーは同じ『優美と品位』でカントに刺激されながらも、彼をこう批判している。「カントの道徳哲学では義務の理念が余りにも厳しく論ぜられ、そのためあらゆる優美(Grazien, ラテン語; ドイツ語は Anmut) はそれに尻込みしてしまい、弱い思考力 (Verstand) は禁欲的・修道僧的な疑わしい道に道徳的完全性を求めようという気になやくなり得よう」。³⁰ 先述した「魂」において、人間は思考 (denken) だけでなく、外界を知覚し (empfinden)、主体的に感じる (fühlen) のであって、³¹ 哲学者のカントと違って、詩人として創作するシラーにとって種々な状況での人間を全面的に描写しなければならず、感情 (Gefühl) は思考と同じく重要なものである。ヨハンナが神の命に反して、敵将ライオネルに止めを刺せなかったのは彼の高貴な顔を「知覚」(empfinden) し、彼に愛を感じて (fühlen) しまったからで、このように「美」と「感情」は人間の行為 (Handlung) に積極的な役割を果たすのである。

シラーは1800年7月10日ヴァイマルから出版者のコッタに、「私の注意力はすべて新しい劇の素材に向けられています。これは私の関心をすべて引きつけてしまい、他のことは何も考えられません」と書き送っている。ここでは新しい劇のタイトルやその素材を明示してはいないが、彼のこの頃の手紙などから推察すると明らかに『オルレアンの乙女』を指し、これに夢中になっ

ている事がうかがえる。そして、この手紙の最後を「あなたの生活と仕事があまく行きますように、そして戦争の嵐があなたの所からそして祖国から去りますように」³²と結んでいる。この「戦争の嵐」にナチオナル版は注をこう付けている。「フランス軍は4月にライン川を越え、オーストリアにウルムの陣地を放棄するよう迫り、そしてドナウ川左岸に侵入した。その結果フランス軍は北シュバーベンも部分的に制圧した」。³³ もちろんこのフランス軍はブリュメール18日のクーデタで執政政府を樹立し、独裁的権力を獲得していたナポレオン・ボナパルト (Napoléon Bonaparte 1769-1821, 皇帝在位 1804-14/15) の率いる軍隊である。『オルレアン乙女』の15世紀ではイギリス侵略軍に対して乙女ヨハンナはフランス解放軍の先頭に立っていたが、その戯曲が創作されていた19世紀を間近に控えたこの時期ではフランスがドイツに侵略していたのである。シラーは当時のドイツの知識人と同じく、フランス革命が始まるとそれに賛意を示したが、国王らをギロチンに、そしてジャコバン党支配下の恐怖政治へと進むと、疑問を抱くようになっていた。このような状況下でシラーが、「戦争の嵐が去りますように」と、この手紙を結んでいることには、特に留意して置く必要があろう。「戦争の嵐」が拡大しつつある時代にこの劇を創作しているシラーは、百年戦争で「人格」としてどう「行為」すべきかと悩み考えている主人公に何を託そうとしているのだろうか。

以上で、シラーの時代状況とその問題がそれなりに提示できたであろう。ニュートンの万有引力の発見、大航海時代と新大陸での植民地化、アメリカの大英帝国からの独立、それに続くフランス革命などで当時のドイツでも新しい時代への息吹が感じられていたと同時に、その後のドイツとフランスは不倶戴天の敵対関係に陥ってしまうが、その予兆も感じられる時代状況でもあったのである。

これでこの項は閉じ、舞台に目を移そう。

魔女のまま捕虜に

第5幕が開くと、そこは昼間だというのに天は暗雲に覆われた荒涼たる森の奥深くで、炭焼き夫婦の会話で始まる。前場で鳴りだした雷がここでも稲光を放ち、大木を打ち倒し、天空では嵐という「恐ろしい戦争」(3057)が荒れ狂っている。これには「野獣さえおとなしくなり、自分たちの巣穴に身を隠している」(3058f.)³⁴のに、人間どもはこの森を挟んで両軍に分かれ、大砲をぶっ放している。イギリス軍は大敗し、散り散りになっていたのに、「あの乙女が魔女になって、敵はもう王様を恐れなくなった」(3069)からで、前幕での「魔女裁判」は一人の乙女を追放したというだけでは済まず、あの「魔女」がいなくなったフランス軍などもはや恐れるに足らずとイギリス側は再結集し、反攻に転じた訳である。

ところで前幕の雷について、それが地霊かまたは神によるものかはひとまず置いてきたが、この場での悪天候は前幕の続きであること、そして炭焼き夫婦の会話の内容から見ると、前幕のも神のもので、人間と神との「部類」の違いを主張している。しかし、その内容は人間という「部

類」には許されない魔女裁判を批判していたのか、乙女の犯した罪に怒りをぶつけていたのかなど、それは推測の域を出ないが、この幕では人間という「部類」が野獣と比較され、それ以下の「部類」に貶められていよう。この炭焼きの民（Volk）はこの雷を神（Gott）の声（Stimme）として聞き、その真意を正しく理解している。まさに「天声民語」（Volkes Stimme Gottes Stimme）と言えよう。

さて、そこに魔女として追放されたヨハンナと彼女の許婚ライモントがやって来る。炭焼きは二人の疲れ切った姿を見て、小屋に入るよう勧め、その妻は武装した乙女を見て驚くが、「こんな厳しい時代だから、そうだな！王妃みずから、イザボー様が武装をして敵陣に居るのを見かけたと言う者もあるし、羊飼いの乙女がわしらの主君、国王のために戦ったと言うことだからな」（3081ff.）と、彼女がその乙女自身であることに気づかない。炭焼きは乙女に水を飲ませ元気づけるため、小屋から器を持って来るよう妻に言いつけ、ライモントはその心づかいを見て、ヨハンナに「ごらん、人間みんなが無慈悲ではないんだよ、荒れた森にも心優しい人が住んでいるんだ。元気を出せよ。荒れ狂った嵐も静まり、穏やかに輝きながら日が沈んで行くよ」と励ます。乙女たちは国王の陣営に行く途中と炭焼きは推測し、「この近くにイギリス人が陣を敷き、森の中をパトロールしているから注意するように」（3095ff.）と忠告する。それを聞いたライモントが「どうここを抜けたら良いんだろう」と困惑すると、「町に行っている息子が帰って来るまで待ちな。わしらは抜け道を知ってるから、それに案内させるから」（Vgl. 3098ff.）と提案する。ライモントはヨハンナにそっと「兜を脱ぎなよ、鎧も、そんな格好ではお前だということが分かってしまい、お前を守ることはならないよ」（3102f.）と提案するが、彼女は首を振る。妻は器を手に出て来ると、丁度そこに息子が帰って来る。妻は息子を紹介しながら、「飲みなされ、高貴なお嬢さん、神の恵みがありますように」（3106）と乙女に器を差し出す。息子は乙女が面貌を上げて、器を口元に付けるのを目にし、サッと歩み寄り、彼女からそれをもぎ取り、「おっかあ、何て事してんだ、誰をもてなしとるんだ。こいつはオルレアンの魔女だぞ」（3107f.）と叫ぶと、炭焼き夫婦は「神さま、お許しを」（3009.）と叫び、十字を切り、逃げて行く。町に行っていた息子はそこで戴冠式の行列とその後の魔女裁判を目にし、森に止まって働いていた夫婦とは違い、ヨハンナの素顔を見知っていたのだ。戦場で兜をつけた乙女はイギリス側に魔女と恐れられたが、戦場から離れた今それを取れば、味方だったフランス人に魔女と恐れられ、水も飲ませてもらえず、逃げ出されることになった。

ヨハンナはフランスには魔女として追放され、このままではもう父の住む故郷にも帰られず、彼女を魔女と恐れ、「恐ろしく血なまぐさい復讐を誓った」（3118.）イギリス兵がうろつき回っているこの森の中をライモントとさ迷っている。彼女は気持ちを落ち着け、静かに彼にこう言う。「分かったでしょう、私には呪いが付いているの、そして皆がみな私から逃げて行くの。あなたは自分のことを心配して、私から離れてください」（3110-11）と、それではお前は一人になってしまうのではと心配する彼に、「私は一人ぼっちじゃないわ。私の上で雷が鳴っていたのを聞いたでしょ。運命（Schicksal）が導いてくれ、求めずとも、目的地に到達するのよ」（3114-16）

と答える。ヨハンナはライモントに雷の言葉を「聞いたでしょ」という形で（彼にそれが分かるはずはないが）、彼女が聞いた内容を話していると言えよう。すなわち彼女は雷鳴を神の声として聞き、あの罪ゆえ神に見捨てられ、そして聖剣を失ったゆえ、戦いになっても神の加護はもはや期待できず、神の定めた運命に身を任せるしかない。つまり第4幕第1場での人間宣言に至る長い独白の内容と同じで、今後は人間という「部類」で運命の導きの途上に現れる試練に自力で対処しなければならないと言うことである。

そんな許婚をライモントは一人残して行くこともできず、彼女の手を取って、「反省しようと思わないかい。神様と仲直りして、— 聖なる教会のふところに戻ろうとは思わないかい」（3130ff.）と、悪霊と手を切るよう勧めると、ヨハンナは「あなたまでも私が重い罪を犯したと思ってるの」と問い詰める。彼の方は「そうしかないじゃないか。黙ったままでは自白と同じだよ」と答えられ、ヨハンナはそれに対して、

あなたは惨めな私に付いて来て下さり、3135
世間の人々が皆で私を追い出しても、私からしっかり離れずに、
私に対して心変わりしなかったたった一人の方なのに、
そのあなたが、神を捨てた悪徳女だと
私を思ってるなんて— ひど過ぎるわ！

そう言われてもライモントは信じられず、イギリス軍を打ち破り、ブルグントを翻意させてフランスを統一し、ランスを取り戻し、そこで戴冠式の先導をした「これまでの奇跡の数々を、あんたは神の力と聖女と一緒に成し遂げたとでも？」（3141-3）と問うと、彼女は「他にある訳ないじゃない」（3143）と答える。彼は驚き、今ここでそう言われても、父親ティボから魔女という告発を受けた肝心な時、国王の前では黙っていたのではと、にわかには信じられない気持ちを吐露すると、彼女は「私の師（Meister）である神（Gott）が私に定めた運命（Geschick）に、黙って従っていたのよ」（3147-8）と答える。さらに彼は「お父さんに何も返答しなかったじゃないか」（3149）と問い詰めると、ヨハンナは「その運命（es）はお父さんから投げ掛けられたのだから、神（Gott）から来たのですし、それである試練（Prüfung, 試験, 検査）もお父さんらしくなるのでしょうか」（3150-1）と答える。

これまで述べて来たように、彼女はほとんど「神々」（Götter）と複数形で言っていたが、ここでは「神」（Got）と単数形で言い、しかも3149詩行では「私の師」（mein Meister, 3149）と同格で添えていることに注意したい。これは明らかに新約の神、イエズスである。彼が教えている弟子たちにとって彼は「師」となるように、乙女ヨハンナは彼を「師」と仰ぎ、彼の課した「運命」（Schicksal, 3115）に導かれていることになろう。では聖母マリアをヨハンナに遣わした旧約の神から新約のイエズスに変わったのはどこからであろう。旧約の神が乙女を見捨て去って行ったのはあの第3幕第10場で、彼女が聖母マリアの命に反してライオネルの命を奪

わず逃した時であろう。そしてヨハンナのこの台詞に従えば、イエーズスが師と神として現れたのは父ティボが自分の娘を魔女と告発した時で、彼は雷鳴で彼女に「(父なる神は去られ)、これは私がお前に課した運命 (Geschick, 3147) で、……」などと告げていたことになろう。しかしヨハンナはその内容を私たち読者や観客に、そしてライモントにも何も話していないので、

ライモント 天が自らあんたの罪を証明したのか!

ヨハンナ 天が話されていたので、私は黙っていたのよ。

ライモント 何だって! あんたは一言で自分の潔白を示せたのに、

世間の人が無茶苦茶な思い違い (Irrtum) をするが儘にしていたのか。 3155

ヨハンナ それは思い違いではなく、運命 (Schickung) だったのです。

これまですべてに「運命」という訳語を当てて来たが、() 内に示したように >Schicksal< (3115), >Geschick< (3147), >Schickung< (3156) である。これらの「運命」と違って >Verhängnis< は「いつも悪い意味で、不幸な出来事に用いられ」³⁵、訳語としては「非運」が適当と思われるが、それをヨハンナ使っていないため、彼女は自分に定められたものを主観的には悪く悲しいものと取っていないと思われる。さて、先ず >Schicksal< は「不意にまたはより高度な秩序の法に従って或る特徴を備えて生じる出来事の総体であり、またこの地上でそれらの出来事を順序づけ、生起させ、決定する最高の存在そのものも指し」、>Geschick< は前者と違って「出来事の総体のみを指し」、それを生じさせる存在は含まず、>Schickung< は「色々な出来事の関係とその時間的な繋がりを示し、それらの出来事はそれを引き起こし、秩序づける存在の意図と計画に従っている」³⁶ 運命である。これを考慮してこれまでの出来事を見ると、父デイボによる告発 (ヨハンナは神に課されたものと取っているが) と言う >Geschick<、それに続く人々の彼女を魔女と信じてしまった「思い違い」と言う >Schickung<、さらに続いて起こる国王の魔女追放令と炭焼き小屋での邪険な扱い、これらの総体は「師なる神」によって彼女に定められた「運命」(Schicksal) であり、ライモントとは無関係であるため、先ほど彼に「自分のことを心配して、私から離れてください」と言ったのであろう。彼女のこの返答で、彼女は潔白であったのかと思ったライモントは、

あんたは無実なのに、あんな汚辱にじっと耐え、

不平一つ漏らさなかったとは!—

あんたという女にはびっくり仰天で、ショックで動けず、

おいらの胸底では心臓がでんぐり返ってるよ!

3160

あんたの言葉をこれで喜んで本当だと信じるよ、

あんたに罪があるなんて、とても信じられなかったんだから、

だけど、人間の心があんな酷いことに黙って耐えられるなんて、

とてもじゃないが思えなかったよ。

ここで留意しなければならないことは、シラーはライモントにここで決定的な質問をさせていないことで、すなわち「神はそれまで彼女を厚遇して来たのに、なぜ突然このような運命を彼女に課したのか」という疑問である。これを逆に言えば、彼女は自分の犯したライオネルを殺さなかった事によるあの2つの罪を、なぜ彼に隠しているのかと言う疑問である。それに対する彼女の思いは、神への罪は自分と神との問題で、彼には無関係だからと言うことであろう。しかしシラーにとっては、彼女に神とフランス社会に対して犯した異種の罪をどのように解決させるのか、それを最後まで取って置くためであろう。ノルベルト・エラス (Norbert Oellers) は、「父ティボが決然として彼女の魔術を告発した時、彼女は審理されなかった罪 (Schuld) の償い (Sühne) として罰を受け入れるため黙っている。(彼女の態度は、判決とは無関係の罪 (Verbrechen) のため死刑を受け入れるマリーア・ストゥアルトのそれと、同じと言えよう)」³⁷と書いている。この突然の引用で分かりにくい箇所があるかも知れないので、少し補足して置こう。エラスが書いている「審理されなかった罪」は、もちろん聖母マリーアの命に反しそのイギリス人を殺さなかった件で、罰はオルレアンの解放など一連の奇跡を魔術で行ったと言う告発による判決、つまり追放であり、同じシラー作のマリーア・ストゥアルト (Maria Stuart, 1800年初演) は無実なのに国事犯として死刑罰を宣告されるが、彼女は若い時に犯した罪に対するものとしてそれを受け入れるのである。エラスの見解にはおおむね賛成であるが、ただ新約聖書のイエズスが旧約の彼の父なる神が去った後、ヨハンナに雷鳴で運命を課しているのを彼女は聴いていた、そのため黙っていたという点には留意の必要があろう。

1801年2月11日の段階でシラーは第3幕までヴァイマルで創作していたが、気分転換して仕事を進めるため、かつて購入した家のあるイェーナに行き、4月3日ヴァイマルに帰って来た。そして同日3日付けで、ゲーテにこう書いている。「2週間ほどでゴールに達したいと思っています。(中略)私のヒロインは一人でそこに自分の足で立ち、不幸にあり、神に見捨てられているので、彼女の自立性と預言者としての役割に対する主人公としての要求はよりはっきりと示されるのです」³⁸この手紙の末尾で、第4幕の終わりで雷を轟かせておいたから、劇的な効果を十分期待できるとシラーは書いているので、この手紙を書いている時には、彼はこの第5幕に着手し、丁度この辺りにいると予想できよう。劇中でヨハンナは神の課した運命に導かれていると言っているが、シラーはこの手紙で、彼女は「神に見捨てられ、彼女の自立性ははっきり」と書いています。父なる神は聖母マリーアを通して命令を下していたが、子なるイエズスは彼女に運命を課しはするが、何も命令も強制せず、彼女の師として見守るだけなのであろう。それゆえ今後降りかかって来る彼女の運命に対する行為は、感情を持った人間として自立し、自由なものとなろう。

彼女が魔女などではなかったことを確信し、それ以上に彼女の超人的態度に感服したと言うライモントの台詞を聞いて、ヨハンナは先ほどの手紙で述べられていた「預言者としての役割」を

人間としてこう吐露する、「師の意志を盲目的に敬わなかったら、私は遣わされた^{もの}女であるに相応しいでしょうか」(3165-6)と言い、魔女裁判からの運命を受け入れているようである。そして彼女はこう続ける。「私はあなたが思っているほど惨めではありませんわ、私は窮乏に苦しんでいます、それは私の身の上にとって不幸なことではありませんよ。私は追放され、逃亡の身ですが、この荒涼とした地で私は自分という女^{もの}をはっきり知るようになりましたわ。榮譽の光に包まれていた時、私の胸を占めていたのは確執 (Streit) ばかりで、私が最も羨まれていると世間に見えた時、私は最も不幸な女だったのよ」(3167-74)と、人目には陽の当たった彼女しか見えなかったが、彼女の心の内はいつも「確執」の嵐が吹き荒れていたと告白する。それは第2幕第7場でモントゴメリの命乞いを聞き、それに同情し、腕は震えたにもかかわらず、聖剣が彼の肉体に切り込んで行ったことを指し、³⁹それは殺したくない、しかし殺さなければならないという「確執」であり、故郷で羊を追っていた牧歌的な暮しと戦場での殺し合いという2つの世界の「確執」、ライオネルを愛していたいが、敵は殺さなければならないと言う「確執」⁴⁰であろう。しかし、その様な具体的内容はライムントにはもちろん伝えず、「今これを私は克服しましたし、この自然の終わりを告げるかようなこの嵐は私の友でしたわ、嵐は世界を、そして私も洗い清めてくれました。私の内には平安が宿ってるの。— もう何が起こっても、私は非力なんかではないわ」(3174-79)と言う。とにかくシラーがあの手紙で書いていたように、彼女は情感を持った人間としての自立と神の命令からの自由を獲得したと言えよう。

ライムントが「行こう。あんたの無実を、世間の皆にはっきり大声で、知らせに急ごう」(3180-1)と急かすと、ヨハンナはそれを制して、「この紛糾を生み出られたお方が、解いて下さるでしょう。それが熟した時にだけ、運命の実は落ちるのよ。私を清めてくれる日がやって来るのです。そして今私を拒み、非難している人たちは、自分たちの思い違いに気づき、私の運命に涙するでしょう」と予言的な言葉を漏らす。彼の方は驚き、「おいらに黙って耐えておれとでも、偶然 (Zufall) の解決まで・・・」と言うのを遮^{さきぎ}って、「あなたは物事の自然な面しか見てないの、あなたの目はこの世の枷に縛られているからよ。私は不死なものを見たの、— 神々 (Götter) がいなかったら髪の毛一本落ちないのよ — ほら、空のあそこで太陽が沈んで行くでしょう — 明日にはまた輝いて昇って来るの、その様に真理の日が必ずやって来るのですよ」と、「神々」という言葉がなければ、新約聖書でイエズスが弟子たちに教えているかのように語っている。ライムントは現実の出来事を「偶然」の連続と取り、ヨハンナはその奥に神々の課す「運命」があると考えているが、この対照は興味深い。その彼女の台詞が終わると、舞台裏からイザボがイギリス兵を伴って現れる。

炭焼きが言っていたイギリス兵のパトロールに二人は遭遇してしまった訳である。兵隊たちは魔女を見て驚き、「神様、お助けを」(3199)と後退し、イザボは後ずさりして来るその兵たちを「幽霊にでも驚いているのか、それでもお前ら兵士か。臆病者め。どうした？」(3199-200)と叱責しながら、彼らをかき分け前に進み、彼女も彼女を見て驚く。イザボが気を取り直して、「お前をわしが捕えてくれるわ」(3201-2)と言うと、ヨハンナはこの「運命」(Geschick, 3212)も

彼女の師なる神に課されたものと受け止め、自らイザボに身を委ねるが、その間にライモンは逃げ出す。ヨハンナが兵に鎖で縛り上げられているのを見ながら、イザボはこう独白する。

これがお前たち軍勢を子羊の群れのように
追い立て、恐れさせた^も猛女^{まき}だったが、こいつは
今では自分の身さえ守ることもできないではないか。 3205
奇跡を信ずる者 (man) がいて、初めて奇跡は行えるが、
男らしい者 (Mann) に出くわせば、女 (Weib) になるのか。

イザボもトルボトやライオネルのように魔女など信じない啓蒙化された女性であるが、奇跡を信じる「者」が不定代名詞の >man< で、それに対して「男らしい者」が男性名詞の >Mann< とあるのを見ると、性女らしい彼女の台詞と言えよう。その彼女は乙女ヨハンナに向かって、「お前はどのように自分の主人のもとを去って来たのだ」(3208) と尋ね、ヨハンナの「私は追放されました」(3210 という答えに驚き、

追放されたのか、お前はあいつを破滅の淵から救い、
あいつにランスで王冠をかぶせ、
あいつをフランスの国王にしてやったのに、 3215
追放されたとは！これでわしの息子というものが良く分かるわ。
— こいつを陣営に連れて行け。兵たちが恐れ
おののいていた恐怖の妖怪を彼らに見せてやれ。
こいつが魔女だと！ こいつの魔術は全て
お前たちの幻想で、お前たちの気の弱さだ。 3220
(中略)
こいつをライオネル殿の所へ連れて行け —
わしは彼にフランスの幸運の女神を縛ってお送りしてやるのだ。 3224

その言葉を聞き、ヨハンナは驚いて、「ライオネルの所へ！ ライオネルの所へ私を送る前に、今すぐ私を殺してくれ」(3225-6) と、ここに至って初めて運命に抵抗し、イザボがその命令を残して退場すると、イギリス兵たちを挑発し、「お前たち、手中にある私を生きたまま手放すなんて、我慢できるか。復讐しろ！ 剣を抜き、そいつを私の心臓に突き刺し、死んだ私をお前たちの司令官の足元に引っ張って行け。考えてみろ、お前たちの立派な仲間を殺し、お前たちに情け容赦なく挑んだのは私だったんだぞ、(後略)」(3228-31) と挑発を重ねるが、それは無駄に終わり、彼女は鎖で縛られたまま陣営に引き連れられて行く。彼女はこれまで運命に従順に従って来たが、それに突然なぜ逆らうのか。あの戦場でライオネルと相思相愛の仲になったのに、この

まま連行されて行けば、捕え方と捕らわれ方という不平等な関係で再会するのに耐えられなかったのか。又は彼は愛する男であるが、同時に憎むべき敵でもあり、しかもそこには彼女との再開の担保として彼が持って行った聖剣があり、それは彼を殺すべく神から与えられたものである。人間宣言をした彼女ではあるが、愛と憎の葛藤の末、ひょっとしたらその「殺人鋼」がモントゴメリとの場でのように彼女の手を支配し、彼を殺してしまう事にならないだろうか。神の子であり、かつ彼女の師であるイエズスは自分にこのような運命を課し、彼女がその試練にどう対処するかを見守っているのだろう。とにかく彼女は、イザボの捕虜になった「運命」(Geschick)の次に来る運命を避けようと、その前にイギリス兵に自分を殺させようとしている。彼女はこの場の自分の気持ちをこう結ぶ。

私って以前よりますます不幸になって行くわ。
 恐ろしい聖母さま！ あなたのされ様は何と厳しいことでしょうか！
 私はあなたの恩寵からすっかり外されてしまったのですか。
 神さま (Gott) は現れず、天使はもう姿を見せてくれません。
 奇跡は止み、天は閉じられてしまっています。 3245

彼女の境遇はあのゲートに宛てた手紙にあったように、神に去られ、不幸であり、そして彼女は自立して、この次々降りかかって来る運命に一人で対処して行かねばならない。その試練を課している女を彼女は「聖母さま」と呼んでいる事に注意しなければならないだろう、すなわちここでは彼女の師なる神の聖母のマリーアなのである。この彼女は旧約の神の命に従い神の子を懐妊したマリーアだったが、ここではその子イエズスを出産した聖母としてその新しい神に仕え、ヨハンナに運命を課していると見るべきだろう。そして今後ヨハンナを襲う運命の試練のもとでは、受け入れると言う受動的なものではなく、むしろ能動的・自主的にそれと戦う事になりそうだ。そして、実際そうなる。

未完

【引用・参考文献】

シラーの作品からの引用は Schiller, Werke, Nationalausgabe, Weimar, 1948. により、注では NA. と略し、次に巻数と頁数を記す。同版の『オルレアン乙女』からの引用はその詩行数を本文中に示す。地の文中での引用は「 」の次に(詩行数)で示し、地の文と分けた数詩行にわたる引用ではその訳の右側に詩行数を付ける。

これまでの拙論「シラーの『オルレアン乙女』について」に関しては、『日本福祉大学研究紀要 現代と文化』第124号、2011年発行を「1」、同紀要125号、2012年発行を「2」、同紀要135号、2017年発行を「3」と略し、次に頁数を記す。

- 1 Vgl. J. A. Eberhard: Synonymisches Handwörterbuch der deutschen Sprache. Leipzig. Th. Grieben's Verl. 1910. Sansyusha 1983. S. 600. Art. 717. この二つの形容詞について、「この世の外見的ならびに内面的な財 (Güter) を完全に保持している者を >glücklich< (幸せ)」と言い、それと比

- べて「現世のものとは思われない超感覚的な喜びに浸っている者を >selig< (至福) と呼ぶ」とある。
- 2 Lessing, Gesammelte Werke in 10 Bde, hrsg. v. Paul Rilla, Aufbau Verl. Berlin u. Weimar, 1968. B. 2. S. 317.
 - 3 注1. の同掲書, S. 582.
 - 4 Vgl., NA. B. 9. S. 205f. Vers 1022-1037.
 - 5 この内容全体は「1」, S. 15.
 - 6 Vgl., 「1」, 6f. そこではジャンは「清女」か「性女」が問題とされていた。
 - 7 Vgl., 「3」, 「乙女の咎と苦惱」の項, 特に S. 27f.
 - 8 注1. の同掲書, S. 868.
 - 9 Ibid.
 - 10 騎士道では決闘を申しこむ者はこのように手袋を投げ, 受ける者が投げられたそれを拾うと, 決闘が始まる。
 - 11 Vgl. 「3」, S. 22.
 - 12 「3」, S. 14.
 - 13 3039 詩行の「お前はわしの腕を」から最終までの原文は次のとおりである。

die Hand nur reiche mir
Zum Pfand und Zeichen, daß du meinem Arme 3040
Getrost vertraust und deiner guten Sache.

この最終詩行の >und< 後には次のように下線部で示したものが省略してあると考えるべきであろう。
>ich< deiner guten Sache getrost vertraue. 「わしはお前の良きことを安心して頼りにできる」。
 - 14 Vgl. 「3」の「黒騎士とは？」 S. 15.
 - 15 注2 の同選集, B. 8. S. 27.
 - 16 Goethes Werke in 14 Bde, Christian Wegner Verl., Hamburg, 1972. B. 3. S. 18.
 - 17 「2」, S. 8.
 - 18 Vgl., 注1 の同書, S. 566f. Art. 672.
 - 19 Vgl. NA. B. 3. S. 243.
 - 20 Vgl., Philosophisches Wörterbuch, Neu bearb. v. Georgi Schischkoff. 22. Aufl. Alfred Kröner Verl. Stuttgart. 1991. S. 467.
 - 21 Vgl., 注1. の同書, S. 776. Art. 1020.
 - 22 NA. B. 20. S. 272.
 - 23 1136. Deutsches Universalwörterbuch, 2 Aufl. Hrsg. V. Günther Drosdowski, Dudenverlag, Mannheim / Wien / Zürich, 2. Aufl. 1989. S. 1136.
 - 24 Vgl. 注1. の同書, S. 742ff. Art. 742-3.
 - 25 Gemeinnützlich Fremdwörterbuch, hrsg. v. Dr. Friedr. Alb. Rieman. Gottfr. Basse Verl. Quedlinburg u. Leipzig, 1828. S. 4.
 - 26 Goethes Werke in 14 Bdn, v. Erich Trunz, Christian Wegner Verl. 9. Aufl. Hamburg, 1972. B. 3. S. 44. Vers. 1237.
 - 27 『ゲーテ全集 第2巻』, 人文書院, 昭和43年5月30日重版発行, 京都市, 41頁。
 - 28 『日本語大辞典』, 小学館, 東京, 昭和56年12月10日発行, 見出し語「おこない」。
 - 29 Vgl., 「3」, S. 71f.
 - 30 NA. B. 20. S. 284.
 - 31 Vgl., Deutsches Universal Wörterbuch A-Z, Duden 2. Aufl. Mannheim/Wien/Zürich. 1989, S. 1377. 見出し語 Seele.
 - 32 NA. B. 30. 170f.
 - 33 Ebda. S. 384.

- 34 聖書で雷が出てくるのは『旧約聖書』で7, 『新約』で2箇所、いずれも人間という「部類」と全く違う特別な「部類」としての業の威力を示し、人間にはその神の声が分からない。炭焼きの会話の内容と一致するのは「ヨブ記」第37章第5節から始まり、そこでは「神は恐ろしく大音声で轟かし、大きな事柄を行われるが、我らには悟られず。(中略)野獣は洞穴に入り、そこに止まる」とある。なお「ヨハネの福音書」第12章第29節では、雷がごろごろと語るが、周りの人には誰が誰に何を話しているかも分からず、イエズスが神が語った内容を説明しても、人々にはそれも理解できなかったとある。
- 35 注1の同書, S. 512. Art. 610.
- 36 Ibid.
- 37 Norbert Oellers, Schiller, Reclam 2005. S. 264.
- 38 NA. B. 31. S. 27.
- 39 「2」の22頁参照.
- 40 「3」の「乙女の咎と苦惱」の項, 78-84頁参照.